

グリフィス記念館へようこそ

(1階)

玄関 越前和紙のスクリーンに映し出される、かつての異人館の写真。

Love me little, love me long は再来日の際、福井の人々に贈った言葉。

肖像画 (右から) 松平春嶽 (グリフィスを教師として招いた前福井藩主)

W. E. グリフィスと日下部太郎 (グリフィスの大学の後輩)

由利公正 (グリフィスの福井での友人)

水彩画・絵日記 グリフィスの福井滞在は一年間。その春夏秋冬とエピソードを、彼の手紙・日記をもとにしたイメージで再現 (絵は林ゆかりさん)。夏祭りの絵で大好きなスイカを食べているグリフィスを見つけて下さい。

今昔ギャラリーとグリフィスの著作『ザ・ミカドズ・エンパイア (皇国)』

グリフィスの時代からは写真が町の変遷を教えてください。グリフィスの見た福井は彼の著作に生き生きと描かれています。それは廃藩前後の歴史的瞬間でもあり、その本が日本の歴史を長く海外に伝えました。

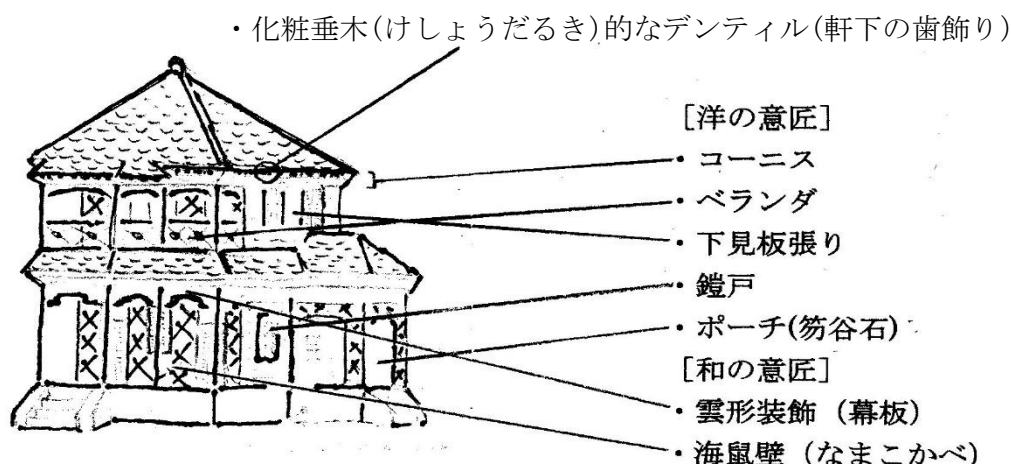
実験器具 福井大学の先生に御寄贈いただきました。質量を正確にはかることが近代化学の基礎であり、十九世紀において日本と西洋との科学力の差となりました。それは国力の差として日本という国の危機を日本人に意識させました。日下部が留学し命を懸けて学び、福井藩がグリフィスを招いた理由です。

(2階)

執務机 ディッケンズを愛読していたグリフィスの要望に応え、文豪が愛用した「ディッケンズ・デスク」と呼ばれるタイプの机を福井の家具職人が新聞挿絵を参考に製作したそうです。どうぞ座ってみて下さい。グリフィスの著作 (福井での見聞を基に創作したフェアリテイルや、出版した英語教科書など) を改めて製本、展示しております。

由利公正への手紙と実家への手紙 (複製) 廃藩後東京府知事となり福井を離れた三岡八郎 (由利) に、「チーチャルス・トレーニング・スクール」即ち日本人教師を育てる学校を整備するよう文部省に建言を頼んでいる手紙です。自分のような外国人にいつまでも依存しない基礎教育のヴィジョンを持ち、既に福井で実践していたグリフィス自身、まもなく東京へ招かれる事になります。大雪の中、福井を去る二日前に書かれたのが故郷フィラデルフィアの家族への手紙です。東京の学校に移籍するために三年という契約を違えて福井を去る、自分の気持ちを整理するため書いたような文面です。

グリフィス記念館の建物について



石材の笏谷(しゃくだに)石は市民の皆様から御寄贈いただきました。

記念館の建物は、福井藩が教師として招いた米国人 W. E. グリフィスのために明治四年(1871)に建てた家の外観を、わづかに残された資料から福井市が復元したものです。館内は明治期の洋館を参考にした展示・休憩スペースです。

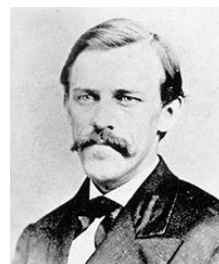
福井藩はグリフィスたち外国人の居住用に洋風の家を二軒完成させました。グリフィスが福井で七か月暮らした武家屋敷(今の北ノ庄城址前)から、新築成った洋風家屋に引越して住んだのは四か月間。その家はグリフィスが東京に移った翌年(1873)に焼失しましたが、並んで建っていた同じデザインの家が昭和十一年(1936)まで残っていました。その外観写真が復元資料になりました。家の場所は幸橋の北詰で(当館近くの桜橋の東)、グリフィス・日下部太郎像が立つ付近です。(像の背後、奥の通りに面した家の前に「異人館跡」の石碑があります。碑文にある「ルセイ」は住んでいません)。

「異人館」と呼ばれたその家の特徴は、時代を映す和洋混淆のデザインにあります。西洋文化の流入を受けつつ、煉瓦や石造の技法、また「洋館」の様式が未消化の段階で、日本の大工・左官がもてる技術と創造性をいかんなく発揮した過渡期。その時期の現存する洋風建築の姿は、様式にとらわれない自由からそれぞれに魅力がありますが、残存は稀です。瓦の目地に漆喰を盛った海鼠壁(なまこかべ)とベランダが融和する当館の外観は、明治元年に東京築地の外国人居留地に建てられたホテルにもみられる維新时期独特のデザインであり、現存建築もなく貴重です。グリフィスはその家で生徒数名と同居し、キリスト教解禁前にもかかわらずクリスマスパーティーを多くの人たちと共に楽しみました。決然と新しい時代を自ら切り開くため福井藩の人々がその藩の最後の日々を力づよく生きた時代の象徴として、また新時代を生きる少年たちが未来を夢見た月日の残影として、永く伝えたい建築作品です。

ウィリーの一生 1843~1928

(本名ウィリアム・エリオット・グリフィス。

ニックネームがウィリー)



1、神の道にめざめる (20 さい、1864 年)



ウィリーが十代のころ、彼の国(米国)で戦争

が起こり、大勢の人が亡くなりました。ウィリー

も兵隊として戦いました。職人だった彼は、キ

リストの教えにしたがって生きる道を人々に伝え

ることを一生の仕事にしようと決めて、勉強するために大学に入りました。

2、日本の武士に出会う (23 さい、1867 年)



大学で学びながら、ウィリーは大学に入る

ために学んでいる若い人たちが通う学校で

勉強を教えました。彼の生徒の中には、日

本をりっぱな国にしたいという思いで米国

に学びに来た武士たちもいました。福井か

ら来た日下部太郎という武士はみんなが驚くほど賢いがんばりやでしたが、

大学を卒業する前に肺の病気で亡くなりました。

3、福井の学校で教える (27 さい、1871 年)



くさかべ おち ぶくい ぶし にほん
日下部の思いをうけつぐ福井の武士たちは、日本の
みらい ひつよう がくもん おおぜい おし
未来のために必要な学問を大勢のこどもたちに教
えてくれる先生を米国から呼ぶことにしました。

せんせい えら にほん き ぶくい しろ なか いえ す
先生として選ばれたウィリーは日本に来て、福井のお城の中の家に住みながら、
しろ がっこう べんきょう おし どうじ にほん もっと すす ないよう かがく ぶくい
お城の学校で勉強を教えました。当時の日本で最も進んだ内容の化学を、福井
の生徒たちはウィリーから学びました。



4、武士の時代が終わる (28 さい、1871 年)



どうじ ぶし にほん みらい しんけん かんが
当時の武士は日本の未来を真剣に考えていました。

ぶし べんきょう えら ほか ひと ぶし
武士だけが勉強して、偉そうにして、他の人は武士の
いうことをきく・・・それでは日本はりっぱな国になれ

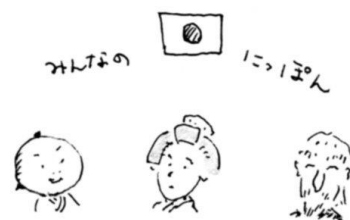
ない！ ぶくい ちじ とのさま ぶし ほか みぶん ひと おさ
福井の知事(殿様)は、武士が他の身分の人を治めるという、それまであ
たりまえだったかたちをやめると宣言しました。まもなく政府の命令(廃藩)で

とのさま ちじ ぜんこく ぶしだん かいさん しろ わか かい とのさま
殿様は知事をやめ、全国の武士団が解散しました。お城でのお別れ会で、殿様が

じぶん けらい ぶし くに
自分の家来だった武士たちに、これからは国のた

めにがんばって生きてほしいと伝えました。ウィ

リーはその日のことを一生忘れませんでした。



5、日本の歴史を書く (32 さい、1876 年)



あたらしい日本をつくろうとがんばる人たちと

ともに暮らして、ウィリーはなぜ日本人が

自分の国を変えたいと願うようになったの

かを考え、日本の歴史を知ろうと思いまし

た。東京の学校で教えるようになってから

も、ウィリーは多くの人と話しました。そして米国人と日本人とで違うところ

じところがあり、それぞれの文化を知ることが大切だと母国の人たちに伝える

ため、ウィリーは帰国してから日本の歴史と自分の経験を本に書きました。

6、米国と日本のかけ橋になる

ウィリーが書いた本は外国人が日本を知る

ためのすばらしい本として、長い間広く読

まれました。キリスト教では、すべての

人類、宇宙のすべてを神がつくったと信じます。キリスト教の信者ではない人

たちもふくめた、地球のすべての人々の歴史が尊いもので、日本人も米国人も

同じように、世界のためにがんばって生きているのだとウィリーは語り続けま

した。60歳で牧師を引退した後も、たくさんの本を書き続けました。



7、最後のお別れ（83 さい、1927 年）

84 歳で亡くなる前の年、ウィリーは奥さん

といっしょに、再び福井にやって来まし

た。五十年以上の間に、町のなにもかもが

すっかり変わっていました。でも福井の人たちは、ウィリーが福井の学校でいっ

しょうけんめい勉強を教えてくれたこと、米国に帰ってからも日本を応援し続

けてくれていたことに、とても感謝していました。ウィリーは町の人たちに

大歓迎され、感動で涙があふれるのをおさえられませんでした。



8、人々のしあわせ

福井で暮らしていたころのウィリーには、福井の人たち

が米国人とくらべて、とてもおだやかに、楽しそうに生きているように見えまし

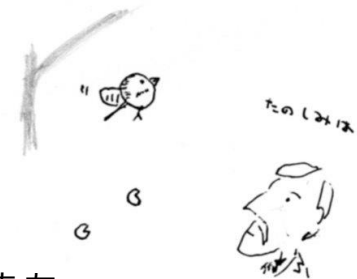
た。それは、必要以上のものをほしがらず、日常の小さなしあわせを大切にし

ているからだと思われました。それは橋 曙 寛がよんだ歌にも、宗教の古い

教えにも通じる生き方でした。日本は昔と比べてりっぱな国になったけれども、

そのためにがんばるだけではなく、本当にしあわせかどうかを大切に忘れずに

生きてほしいと、ウィリーは福井の人たちのために祈りました。



年表

- 1843 ^{べいこく} 米国ペンシルバニア州 ^{しゅう} フィラデルフィア ^う 生まれ
- 1865 ラトガース大学 ^{だいがくにゅうがく} 入学 (場所 ^{ばしょ} は米国 ^{べいこく} ニュージャージー州 ^{しゅう} ニューブランズウィックで、ニューヨークからも近い)
- 1867 ^{くまもと} 熊本の ^{ぶし} 武士 ^{しよこい} 横井 ^{さへいた} 左平太 ^{よこいだいへい} や ^{きょうだい} 横井 ^{よこいしゅうなん} 大平 (兄弟で、横井小楠の ^{くさかべ} おい)、^{くさかべ} 日下部 ^{たろう} 太郎 (福井の ^{ぶし} 武士)、^{かつころう} 勝 ^{かつかいしゅう} 小鹿 (勝海舟の子) ^こ ら ^{にほんじんりゅうがくせい} 日本人留学生と ^し 知り ^あ 合う
- 1869 大学 ^{だいがく} を ^{そつぎょう} 卒業し、^{ほくし} 牧師になるための ^{べんきょう} 勉強 ^{つづ} を続ける
- 1870 4月 ^{くさかべたろう} 日下部太郎のお葬式 ^{そうしき} に出る 12月 ^{らいにち} 来日 (横 ^{よこはま} 濱 ^{とうちやく} に到着)
- 1871 3月 ^{ふくい} 福井に ^{とうちやく} 到着、^{がっこう} 学校 (明新館 ^{めいしんかん}) で ^{じゆぎょう} 授業をはじめる
- 8月 ^{はくさん} 白山の ^{ちようじょう} 頂上 ^{のぼ} に登る 10月 ^{ふくいはいはん} 福井廃藩 ^{しきてん} の式典 ^で に出る
- 1872 1月 ^{とうきょう} 東京の ^{がっこうきょうし} 学校教師として呼ばれ、^{ふくい} 福井 ^さ を去る
- 1874 ^{きこく} 帰国して、^{ほくし} 牧師になる ^{べんきょう} 勉強 ^{つづ} を続ける (三年後 ^{さんねんご} に ^{ほくし} 牧師になる)
- 1876 『ザ・ミカドズ・エンパイア』 (日本 ^{にほんし} 史と、^{じぶん} 自分の ^{にほんたいざいき} 日本滞在記) ^{しゅつばん} 出版
- 1927 ^{ふたたび} 再び ^{ふくい} 福井 ^き に来て、^{だいかんげい} 大歓迎 ^{よんはくいつか} される (四泊五日 ^{たいざい} の滞在)
- 1928 ^な 亡くなる (米国 ^{べいこく} フロリダ州 ^{しゅう} ウィンターパーク)



NY州
ステネグティ
ウィリーの おはか

NY州
ニューブランズウィック

90-の
おはか



【こぼれ話^{ばなし}】

家のねずみがうるさいので、猫を飼おうとさがした。町のおばあちゃんが白い猫をかわいがっているのを見て、ゆずって下さいと、がんばって日本語でお願いした。ゆずってもらって「シロ」となづけてかわいがった。ねずみをとる役にはたななかった。おばあちゃんはシロに会いにたずねてきた。



ウィリーがいつもいっしょにいたのは、通訳のいわぶち（岩淵龍太郎）さん。

すらりとかっこよくて優秀で、まだ結婚はしないと言っていたのに、だまって

結婚したのでウィリーはちょっとむかついた。でもずっと仲はよかった。



ウィリーのお手伝いの「さへい」

さんは体は小さいけれど頼りになった。彼には大きくて元気な奥さんと小さい

男の子がいた。彼ら家族との生活をウィリーは楽しんだ。福井の町から見える

白山に登りたいと思ったウィリーは、夏休みにチャレンジした。つれの富士たち

は途中でダウンしたけれど、ウィリーとさへいさんはがんばって頂上まで登

り、感動するほど美しい景色を見た。頂上でお湯がわく温度から気圧を測り、

白山の高さを計算した。ウィリーが思ったとおり、富士山よりは低かった。

ウィリーが来る前から福井の学校で教えていた外国人がいた。それが英国人のアルフレッド・ルセーさん。ウィリーが来てからいっしょに散歩したり旅行に行ったりした。当時は大勢の外国人が、新しい日本をつくるために日本人と協力してはたらいっていた。ルセーさんが先に学校をやめてから、福井の外国人はウィリーだけになったので、彼はちょっとさびしかった。

アオモリけしのふしたちと
ぼくじょうをつくったぜ



ウィリーは福井に来てから昔ながらの日本の家に住んでいた。歴史ある住宅での生活にウィリーは満足していたけれど、彼のために西洋風の家を建ててもらえたので引っ越した。福井で初めての煙突のある家だったので、つくった人に経験がなく、火事の原因になり家は燃えてしまった。

(ウィリーが東京に引っ越した後で、別のアメリカ人教師が住んでいましたが、みんな無事でした)

あすわ川の
かわべに
たてました



ウィリーのあと、ふくいの
めいしんかんであしえた

マジエツエ

ワイコフせん



ウィリーの新しい家の、大きさと外からの見た目を同じように建て直したのが、今のグリフィス記念館。ウィリーは新しい家に引っ越してから、自分の生徒たち何人かといっしょに暮らすようになった。お互いの言葉を見え、日本のことを

もっとよく知ろうとした。クリスマスには同居する人たちにプレゼントを贈り、パーティーを開いて大勢の人と楽しんだ。

クリスマスはもともとキリスト教の行事で、当時日本人にはまだキリスト教が禁止されて

いたので、日本人といっしょにクリスマスパーティーを開くのは特別なことだった。



この福井でのパーティーは、現在残された記録がわかっている中では日本では



最初のものである。

当時福井の人は夏の足羽川で泳いだ。

ウィリーも泳ぎを楽しんだ。元気なウィリーは馬に乗って、福井の町の外にもよ

く出かけた。越前和紙をつくる作業を見に行き、現地の屋敷に泊まった。日本の

古い部屋や庭の落ち着いた美しさがウィリーは大好きだった。日本人に新し

い科学を教え、日本が新しい社会をつくるために協力しながらも、ウィリー

は日本人が古い美しい文化を失わないで

ほしいと心から願った。



【ウィリーの教え子たち】

○なかの としお (中野外志男)

リーフレットのしんせいで
ウィリーの左上の子



ふくい じよしゆ とうきやう ちしつ こうぶつがく おし わか な
福井で助手をつとめる。東京で地質・鉱物学を教えたが、若くして亡くなった。

○おおいわ かんいちろう (大岩貴一郎)



ふくい じよしゆ こうちやう つと ぎふけんたかやま そんけい
福井で助手をつとめる。校長として勤めた岐阜県高山でとても尊敬されている。

○いまだて とすい (今立吐酔)



てら こ きこく べいこくりゆうがく かがく まなぶ きこく
お寺の子。ウィリーの帰国に合わせて米国留学し、化学を学ぶ。帰国してすぐ

きやうと こうこう こうちやう がっこうきやういく ほか にほんぶつきやう こくさいか こうけん
京都の高校の校長となる。学校教育の他、日本仏教の国際化にも貢献した。

○なかざわ いわた (中沢岩太)

リーフレットのしんせいで
ウィリーの左下の子



めいじ にほん だいひやう かがくしゃ よ
明治日本を代表する化学者のひとり。ウィリーから「キャスパー」と呼ばれた。

○いしづか さげん (石塚左玄)



やくがく ぐんい じゆうようせい せんくしゃ
薬学をおさめ、軍医となる。ミネラルバランスの重要性をとなえた先駆者。

○ひらせ さくごろう (平瀬作五郎)



ず がきやうし とうきやうだいがく しょくぶつがく けんきゆう じ き
図画教師となる。東京大学で植物学の研究にいそしんだ時期、イチヨウの

せいし はっけん めいじ にほん せかいてきぎやうせき のこ
精子を発見するという、明治の日本ではまれな世界的業績を残した。

○ささき ちゅうじろう (佐々木忠次郎)、みつおか たけお (三岡丈夫)

さ さ き にほん だいひやう こんちゆうがくしゃ がいちゆう けんきゆう きぬさんぎやう ささ
佐々木は日本を代表する昆虫学者となり、害虫の研究で絹産業を支えた。

ウィリーが「ジョーンズ」と呼んだみつおか べいこくりゆうがく てつどうぎじゆつしゃ
ウィリーが「ジョーンズ」と呼んだ三岡は米国留学し、鉄道技術者となった。

【ウィリーのなかまたち】

○むらた みさぶろう (村田巴三郎)



時代の変わり目に福井の政治を中心で支え、廃藩後は福井の知事(参事)をつとめた。ウィリーを評価していたので、彼が東京に移ることに強く反対した。

○ささき ごんろく (佐々木権六) 忠次郎の父



全国にさきがけて洋式の船を設計・運航するなど、科学の力で福井に貢献した。福井でウィリーを助けた後、日本政府の仕事で繊維産業の土台を支え続けた。

○みつおか はちろう (三岡八郎・由利公正)



丈夫の父

経済を発展させる行動力で福井をひっぱった。日本政府のお金の運用をとりきる間に、新しい日本の指針を示す有名な文章を書いた。東京の知事をして、ある時に大きな火事があり、寄付金を集めたウィリーが彼に届けた。

○はしもと つなさぶろう (橋本綱三郎) 左内の弟



ウィリーと気の合う友人となった医者で、いっしょに芝居を見に行った。

○まつだいら しゅんがく・そんがく (松平春嶽・巽嶽)



日本を新しい国に立て直す仕事を引退した春嶽(慶永)は東京に住んでいて、来日したウィリーをもてなした。福井の殿様として春嶽の後を継いだ巽嶽(茂昭)は福井藩知事としてウィリーを歓迎し、廃藩により東京へ去った。二人の殿様が育てた学校でウィリーは教え、その学校が福井の社会を支え続けている。

グリフィスと福井の関連人物

安全保障上の深刻な危機意識をもつ十九世紀日本の知識人たちに共通に国家の課題として意識されたのは、幕府および諸藩というかたちで分断されていた国力の結集でした。それは体制の変革、具体的には国家草創からの歴史的な正統君主としての天皇のもとに諸藩を改めて統合する王政復古、さらには藩の解体、中央集権化に至る革命を引き起こします。結集されるべき国民は当然武士身分に限定されず、革命は武家社会内部および武士以外も含めた、身分制社会の打破を伴って進みます。グリフィスはまさに、福井の地で廃藩を目撃し、体験し、この驚くべき革命を生み出した日本という国の歴史へと誘われます。

新体制の成立以前から、より直接的に憂国の士を駆り立てたのは、列強諸国に比べて貧弱すぎる軍事力の強化でした。それは財政の強化を要し、更にそれは徴税の対象でもある産業の振興を要し、そして全ては、決定的に立ち遅れていた科学技術の修得をこそ緊急に要していました。

幕末福井藩の政治顧問としても知られる横井小楠は、松平春嶽をパトロンとする勝海舟のもとで二人の甥を学ばせました。後にこの左平太と大平の兄弟は、来たるべきキリスト教解禁に向けて米国から来日し長崎で活動していたオランダ系宣教師 G. フルベッキの生徒となり、ついには北米への渡航を決意します。

その頃ニュージャージー州ニューブランズウィック（以下 NB）所在の名門大学ラトガース・カレッジは、フルベッキを派遣した米国のオランダ系教会と密接な提携関係にありましたが、牧師を養成する神学校だけでなく、科学専攻課程や、予備校的なグラマー・スクールも併設していました。日本海軍を興す大志を抱いて密航した横井兄弟は、この教会幹部の尽力によって NB へ導かれます。その時点の二人の語学力ではすぐに専門課程の授業を受ける事は難しく、まずグラマー・スクールで基礎的教養から学ぶ必要がありました。彼らはその学校で、講師を務めていたカレッジの優等生 W. E. グリフィスに出会います。

横井兄弟と共に長崎でフルベッキに学んでいた福井藩士日下部太郎は、幕府の許可と藩の支援を得た上で、海を渡り二人に合流します。NB に着いて間もなくカレッジの科学コースに入学した日下部は、類まれな知力と意志で級友たちを瞠目させましたが、海軍兵学校への入校は結核に阻まれます。明治三年(1870)春、カレッジ卒業を目前に満二十四歳で夭折した日下部の葬儀のため、学校は休講し、友人たちが参列しました。その一人 W. E. グリフィスは、半年後福井藩に招かれて来日した際、米国の大学優等生の象徴である金の鍵を携えていました。彼は福井に着いた翌日、息子を異国で亡くした父親にそれを手渡します。

明治三年、フルベッキは東京へ居を移し、最高首脳岩倉具視の信任を得る政府顧問として、また現在の東京大学につながる教育機関の幹部として、新体制を陰で支えていました。学校には長崎でフルベッキに学んだ福井藩の英学者瓜生寅もいました。松平春嶽は福井藩への西洋人教師招聘にあたってフルベッキを頼りました。フルベッキから連絡を受けた伝道局の J.M. フェリス（日本人留学生のため心を砕いた恩人）の要請を受け、ラトガースの卒業生として教授たちの高い評価を得るグリフィスが福井へ行く教師に選ばれました。信仰篤い彼は当時 NB の神学校で学んでいて、遙か東洋への赴任をためらいましたが、親友 R.C. プラインの父が元駐日公使として相談に乗り背中を押ししました。神の崇高な使命と、家族を養う経済的魅力にも動かされ、グリフィスは日下部の故郷の土を踏む決心をしました。そして、その誠実と献身によって、わづか一年の間に科学教育の礎とともに、多くの福井人に忘れがたい記憶を残す事になるのです。

その頃、横井左平太は亡き日下部と弟大平(明治四年逝去)の無念を胸に、海軍兵学校での修練に奮闘していましたが、同胞の道を切り開く先達となった彼も力の限界を痛感し、より若齢での専門的修学の必要を政府に進言することになります。

グリフィスが来日し福井に滞在した明治三、四年は日本人の海外留学ブームに重なります。能力も志も疑われる門閥の子弟では成果に乏しく、同五年の政策転換以降、“基礎は国内で学び、専門課程のみ精鋭を留学させる”という方針が基本となります。

グリフィスが藩校明新館で教える契約上の科目は化学と物理であり、生徒の年齢は今の高校生ぐらいでしたが、彼は自らもてる知識教養の幅広い伝授を惜しみませんでした。藩が彼のために用意した家でも、また夜でも教えました。年少の子にフランス語を、医学志望者にはドイツ語を教えました。グリフィスは日本人教師を育てようとしていました。優秀な生徒に授業を持たせました。少数を選抜して危険な実験を手ほどきしました。そのための実験室も福井藩は建てました。彼の滞在中、藩は消え県となりましたが、教育の熱気は失われませんでした。彼の授業は専属通訳岩淵龍太郎と共に行われましたが、日本人による授業のシステム化のため、グリフィスは自分の講義の日本語テキスト化を試みました。翻訳は難航し、新たに専門チームを結成して取り組みました。橋本左内の後継として福井藩の教育行政を担い、県となってからは旧主松平茂昭に替わってトップの座に就いた村田氏寿が、その全てを見ていました。グリフィスの能力と献身を高く評価する村田は、契約期間半ばでのグリフィスの東京行きの希望に対して「白山の如く」立ち塞がります。ですが結局、グリフィスが文部省の求めに応じて東京へ移る事を、村田も認めざるを得ませんでした。やがてグリフィス宿願の師範学校が、福井を含め全国に整備されることとなります。

グリフィスが見た福井

その時代を生きる者にとって当たり前の事を後世に留める動機は生まれにくく、自分の国しか知らない者が驚きをもって自国の文化、自然、情景を観察する事は難しいものです。渡辺京二氏の名著『逝きし世の面影』は、十九世紀に来日した西洋人たちが驚きのままに書き残した記述から、近代社会成立前夜の日本の姿をよみがえらせました。そうした当時の異邦人目撃者の役割を福井の地において果たしたのが、当時 27 歳、知的好奇心に満ちあふれた米国人青年でした。西暦 1871 年 3 月 4 日(明治四年一月十四日。明治五年まで和暦と西暦は別なので、以下西暦で記載)、福井に到着したグリフィスは、早速翌日から市中を散策します。“唐人”見たさの群衆を、彼もまた観察します。

見ようとせずとも、当時の日本家屋にプライバシーはありません。町を歩けば、表から生活全てが見えます。食事、昼寝、行水。珍奇で細密な商品。精巧な職人仕事の現場。貴金属職人として働いた経歴を持つグリフィスは、安価な工芸品にも宿る日本人の細やかな美意識に敏感でした。彼は街歩きに魅惑され、それを習慣とし、産業社会の成立後消え去った日本の姿を書き残したのです。

十九世紀の日本は、海を越えて来た者の眼には、あまりにユニークでした。それは絵の様に美しい、自然と田園の国でした。福井のグリフィスは献身的教育者であるとともに、好奇心尽きることなき旅人となりました。郊外へ馬を走らせ、祭礼の人波に紛れます。武家の宴に招かれ、足羽山の上から町を眺めます。品質の高い和紙の工程に目を凝らし、河を下って三国の海女に出会い、白山の頂で湯を沸かします。沸点から計算したその標高は、現地の人々の認識を裏切って富士よりも低いのでした。グリフィスは日本を「海のスイス」と表現しています。

足羽川にかかる九十九橋の袂で、大勢が静かに踊る夏の夜。故国では人出に付き物の酔漢も喧噪もない。まさにそこには、『逝きし世の面影』が活写した人々の姿がありました。貧しいながら皆健康で、親切で、愛想がいい。庶民の繊細な礼節。身分を超えた率直な人間関係。厳密に測られた時間労働と引き換えに賃金を得て生きる近代社会とは、異質の時の流れ。グリフィスは魅了されます。「世界で一番幸福な人々。既に我々が冒された物欲という熱病を知らず、簡素に、平和に生きている」(『グリフィス福井書簡』)。貧しさと悲惨がまだ同義ではなかった時代。その情景が“逝きし世”となる必然を知る近代人であるがゆえに、文明開化を託された外国人の心は複雑でした。自分の仕事の成果が、その美しい国を歴史の彼方へ追い、「彼らがこれまで無縁だった悪と悲しみを知ることになると思うと、厳粛なためらいを覚え」ると。それでも彼は進みました。彼は横井兄弟や日下部太郎の思い、維新の志を知っていました。祖国の独立を守る、その願いが生んだ革命の帰結に、彼は福井で立ち会うこととなります。

足羽川を挟んで異人館の対岸に、由利公正(三岡八郎。グリフィスの日記ではMitsoka)の居宅がありました。彼は家族ぐるみでグリフィスと交友しました。橋本左内の実弟綱維も友人となり、共に浜町の芝居小屋に遊んでいます。財政における三岡と共に、軍事において幕末福井藩を牽引した佐々木権六は、渡米して武器の買い付けをした経験もあり、グリフィスの補佐役を務めました。その息子忠次郎は、父の友人となった米国人教師に学び、廃藩後は東京に出た父の後を追ひ、親子で養蚕業の発展に尽くします。生糸は明治日本を代表する輸出品であり、蚕の研究により忠次郎は国を代表する昆虫博士となりました。

廃藩。福井藩というひとつの国が消えます。10月1日、春嶽の後継として最後の越前公をつとめた松平茂昭が城内大広間に参集した旧臣たちに別れを告げ、翌2日、数知れぬ人々の涙と笑顔に見送られて、東京へと発ちました。それはグリフィス滞日中の最も印象的な、生涯忘れられぬ光景となりました。東京の教師では立ち会えなかった、歴史劇的一幕。彼は新日本の誕生を祝福します。そして、数百の封建領主が自ら舞台を降りるといふ革命を成功させた国の、明治四年に至るまでの歴史と、それが培った文化に、自らが研究に取り組む意義を見出したのでした。この五年後、W.E.グリフィスの代表的著作となる、『ザ・ミカドズ・エンパイア(皇国)』が出版されます。

福井は一国の首都の地位を失いました。グリフィスの生徒も、志を共にした武士たちも、東京を目指し、あるいは中央政府に呼ばれ、福井を去って行きます。明新館の授業改革に邁進しつつ、グリフィスも東京での可能性を思わざるをえません。自分のような「お雇い」にいつまでも頼るのではなく、日本人による教育を実現するため、日本人教師をこそ育成する。彼が既に福井で実践していたヴィジョンを国家の政策とする様、東京のフルベッキに、そして東京府知事となった由利公正に働きかけ、結果彼も文部省から招かれます。グリフィスは東京行きを決意し、激論の末に村田氏寿を説き伏せます。複雑な心理での、福井との別れ。生徒の親、友人たちからの、抱えきれない贈り物。1月下旬の大雪。近江への道中、困難は必至です。見送る人々。いつまでも去らず、とうとう武生(越前市)までついて来た十数人の中に、村田の姿もありました。

グリフィスは東京で二年半を過ごしました。帰国して牧師となり、著作により名声も得ました。福井での一年は、絶えず彼の創作の源泉でした。その記憶は老いていよいよ美しく、八十四歳で逝く前年、再び彼をその地へと導きます。

グリフィスと明治日本

1871年12月、G.フルベッキがかつての長崎での生徒である大隈重信に提言した世界視察団構想が、首脳岩倉具視自ら率いる形で実現します。翌年の3月6日、一行が米国連邦議会に招かれた日をもって、W.E.グリフィスは世界史という舞台に日本が自ら登場したとみなし、主著 *The Mikado's Empire* (皇国) 第一部の最後を飾るエピソードとしました。

外圧は明治維新の原因ではない。日本の近代化は外国人によってではなく、この国の人間が指し示した道であり、だからこそ成功した。それが、グリフィスが『皇国』で示した結論です。

・・徳川政権は正当性を持たない。天皇のみが真の君主であり、諸侯も皆その臣下にすぎない。大政奉還も廃藩置県も、日本史において何世紀も準備されて決行された革命であり、外国人が来ずともいずれ幕府および封建制は倒れた。諸侯の分立とそれを前提とする徳川体制は、国力結集の最大の障碍だった。日本は多くの外国人が感じたような、中世社会からの飛躍を一夜にして成したわけではない。日本史には近代化を志向する思想潮流が脈々と流れていた。そして日本史において最も強靱な政治的力の源泉は、常に尊王だった。・・(最終章の要旨)

このような歴史観を英語で最も早くから披瀝し、世界に発信し続けた米国人を、明治日本の要人たちが尊び、叙勲・再来日に至ったのは当然でした。

グリフィスがニューブランズウィックで接した日本人留学生には、横井小楠の甥ふたりの他にも、岩倉具視の息子(具定、具経)、勝安房(海舟)の息子(小鹿。後、米国海軍兵学校で学ぶ)ら明治日本の要人たちの子弟がいました。海舟は福井滞在中のグリフィスに連絡を取り、旧徳川将軍家を知事とする静岡藩にも彼のような優秀な教師を紹介してほしいと依頼します。かくてグリフィスの親友 E.W. クラークもまた来日し、静岡と東京で教鞭を執りました。クラークが後に「誰よりも尊敬する」人について著した書が *Katz Awa* です。また帰国後グリフィスと同じく牧師の道を歩んだクラークは、日本にキリスト信仰の種を蒔きました。福井から東京へ向かうグリフィスに静岡の地で再会したクラークが彼に紹介した旧幕臣中村正直は、留学生を監督する任務で渡英した経験があり、東京でもふたりと親交を結びます。中村は明治六年の布教解禁前に堂々とキリスト教を擁護し、後に自らも受洗しました。中村や福沢諭吉、そして旧幕府洋学校の教官たちが結集した日本初の近代的学会組織「明六社」に、グリフィスも参加しています。日本語で国民の啓蒙に努めた彼ら日本知識人の著作と活動こそ、日本近代化の何よりの推進力とグリフィスは評価するのです。

明六社の社長を辞退した福沢に代わってその任に就いた森有礼は、幕末に薩摩藩からイギリスに派遣された留学生時代、さらなる可能性を求めて大西洋を渡りました。この時共に渡米した薩摩人に、ラトガースで日下部の同窓となる畠山義成がいます。畠山の紹介状を携えて来日したグリフィスは、福井赴任前に東京で森に会います。畠山は岩倉使節団を現地で支え、グリフィスの開成学校（南校の後身。後の東京大学）在職時にはその校長でしたが、早世しました。

少年時代、横浜で宣教師 J. C. ヘボン（ローマ字で有名）や J. H. バラ（ラトガース大卒）夫人に英語を学んだ高橋是清は、十代前半で勝小鹿と同じ船で渡米します。現地では奴隷同然の奉公人として売られる辛苦を嘗めましたが、帰国して森有礼の書生となった後、フルベッキの屋敷に住んで南校で教えました。辞職して数年後、今度は開成学校の生徒となってグリフィスと出会い親交を結びます。日本文化の研究に余念のないグリフィスは、高橋に『膝栗毛』を口頭で英訳させて書き留めました。東京ではグリフィスは姉マギー（官立女学校教師）と同居しており、女性には微妙な滑稽本の内容上、高橋はマギーに席を外してもらうのでした。やがてグリフィスの恩師でもあるラトガースの数学教授 D. マレーも文部省幹部として招かれ、同省に職を得た高橋が通訳を務めます。

明治日本最大の試練となった日露戦争において、高橋が戦費調達最大の功労者となった事はあまりに有名ですが、講和外交を担った大臣小村寿太郎もまた、南校・開成におけるグリフィスの最も優秀な生徒のひとりでした。その後、小村は第一回文部省派遣留学生としてハーヴァード大学で学び、外務省入省後は新興国の厳しい外交の前線に立ち続け、その国際的地位向上を実現します。

日露講和会議の仲介役を務めたセオドア・ローズヴェルトは、グリフィスが牧師として長く暮らし、結婚し、余生を送ったあと永眠の地ともなったニューヨーク州における、オランダ移民の家系の出身です。この一族は後にもうひとりのローズヴェルト大統領を生み、彼もまたセオドア以上に日本人にとって忘れがたい存在となりますが、二人は共通して海軍に執心しました。横井兄弟や勝親子の見果てぬ夢だった強力な日本海軍は、巨大な産業力に支えられたグリフィスの母国の海軍によって滅びます。十九世紀半ばまでの日本が知る唯一の西洋語はオランダ語でしたが、当時世界を主導するのは既に英語国であり、両語に通じるオランダ系アメリカ人は歴史的に大きな存在です。その人脈が、グリフィスを日本に呼び寄せました。日英米蘭の先人が築いた関係は前世紀の世界戦争で大きな傷を負いながら今も、その礎の上に新たな歴史を紡いでいます。セオドア・ローズヴェルトの愛読した『武士道』は永く日本の理想を世界に説きましたが、その書に緒言を寄せた最初期の理解者は、W. E. グリフィスでした。

1927 昭和二年の再会

かつて二十七歳で福井に赴任した科学教師が、半世紀の時を経て、アメリカにおける知日派知識人の第一人者、グリフィス博士として八十三歳で再び来日します。もはや往時を知る者はわづか。グリフィス自身、日本のあまりの変貌に戸惑うばかりでした。自身も種を蒔いた産業発展の驚くべき成果。その代償として消え去った美しい風景の追憶。

日本は今や堂々たる列強国でした。代表的著作『ザ・ミカドズ・エンパイア（皇国）』が版を重ねていたグリフィスは、大日本の預言者・最大の理解者として日本の政財界から評価され、再訪を待ち望まれていました。時至り、新たな叙勲を機会に招かれ、初来日の妻と共に全国を巡ります。講演旅行は拡大した版図を反映して、大陸にまで及びました。そのハイライトは五日間の福井滞在と大歓迎。同居していた使用人や教え子たちとの再会。九年後に焼失することになる懐かしき異人館。昭和のミカドに拝謁し、帰国して翌年、グリフィスは亡くなります。彼の人生の最後に待っていた思いもかけない日々が、また新たな記憶の架け橋となって、明治四年と私たちの時代の福井をつないでいます。

4月25日夕刻 グリフィス夫妻、福井駅に到着。

【館内展示写真案内】

写真1 沿道の駅前通り、歓呼の人波（おそらく29日＝福井を去る日）。

写真2 知事令嬢から花束を受け取っているグリフィス夫人。お店の看板に「羽二重餅」の文字が見えます。

グリフィスが明治四年に交流した日下部太郎の遺族に、妹「おはや」さんがいます。初めて会う外国人に握手されて「恥ずかしいを通り越して、身震いするほど怖かった」思い出も遙か。永井市長に連れられて宿を訪れ、涙々の対面となりました。もうひとり予期せぬ再会を果たしたのが田端「お文（ぶん）」さん。グリフィスは福井居住の間、使用人の佐平一家とともに生活しましたが、その家の子守に雇われた十二歳の少女がお文さんでした。グリフィスの後任教師 E. マジェット、M. ワイコフのもとでも働いていた彼女も既に六十八の齢。「外国人の親切さは今も忘れることが出来ません。殊にグリフィスさんは私が弱かったので無理をするなどそれはそれは可愛がって下さいました。五十六年も経ってから逢えるなどとは本当に夢のような話で、その頃グリフィスさんのお宅にいた人は今は一人も残っていません」と新聞記者に涙ながらに語っています。

懐かしい人と会い、料亭風琴亭となっていたかつての異人館を訪れた最初の夜。翌日からの三日間は歓迎行事と講演会で、多忙をきわめる事となります。

写真3 女学生に大歓迎されているグリフィス夫人。

写真4 27日のお昼、高等女学校（現在のNHKの場所）で講演会。

女学校の制服がこの年まで、まだ着物だった事がわかります。

- 写真5 午後、片町の劇場での講演の後、足羽山で歓迎会。夫妻に着物の贈呈。夜は愛宕坂の料亭（現在橘曙覧文学館がある場所）で宴会。
- 写真6 この日の午前中、県会議事堂で日米児童友好の式典に出席。当時日米関係の悪化を憂えた宣教師たちの尽力で「青い目のお人形」が日本の児童に贈られ、後「黒い目のお人形」が米国の児童へ贈られています。
- 写真7 26日午前10時すぎ、市役所（当時は当館所在地近辺）での歓迎の後、県庁へ向かう車中。夫妻の間に座る立派な髭の紳士は、かつての生徒今立吐酔。帰国するグリフィスに伴われて留学、五年間の滞米中『皇国』の執筆に協力。半世紀ぶりに再会した師の通訳を買って出ました。
- 写真8 県庁前。場所は現在と同じ福井城本丸内。建物はクラシカル。この後、福井中学（かつて教えた明新館の後身。現在の藤島高校）、養浩館へ。
- 写真9 松平康莊侯爵邸での晚餐。廃藩まで知事を務めた最後の福井藩主茂昭侯の子息が康莊侯。『皇国』の挿絵には、往時の康莊少年の姿が（『明治日本体験記』p126. 第14図）。この夜、片町でチャンバラ映画鑑賞。
- 写真10 および11 29日朝、福井を発って敦賀へ向かう直前に、かつての武家屋敷「三秀園」（後の市民プール）へ。新築の洋風住居に移るまでの七か月間、旧酒井外記邸（柴田神社前大通り辺りにあった武家屋敷）で暮らしたグリフィスにとって、思い出がよみがえる光景です。
- 前日の28日にはグリフィスの念願だった高等工業学校、師範学校（共に福井大学の前身）も訪れ、再び片町加賀屋座で学生二千人を前に講演しています。

それから更に半世紀、昭和五十年当時、ニューブランズウィック市（以下NB市）のウィローグローブにある日下部太郎たち日本人留学生の墓は荒れ果てていました。青年会議所からの報告で惨状を知った大武幸夫福井市長が渡米、墓地修繕の費用をNB市に寄付します。これを縁に福井大学とラトガース大学、福井市とNB市の姉妹提携が実現します。

この時代の日下部・グリフィス再発見・再評価が生んだモニュメントが墮涙碑です。グリフィス自身、再来日した際に日下部を記念する碑の建設を望み、福井市長にかなりの額を寄付しましたが当時は実現しませんでした。昭和五十一年、福井市立図書館横に青年会議所によって建立された石碑には、日下部が亡くなった三年後に吉田東篁が残していた文章が刻まれています。グリフィス宿願の碑は現在当館敷地に移され、昭和四年にグリフィス夫人が福井市に寄贈した日時計とともに、先人の思いと、その物語を静かに伝えています。（日時計の原物は戦後失われましたが、台座は昭和九年に設置された当時の物です。）